きょうと生物多様性センター

ニュースレター

令和７年３月

２号

太古の湖盆の原風景が残る、亀岡市内の田園風景

CONTENTS

きょうと生物多様性センター運営協議会　副会長ごあいさつ　―２
保全現場からお届け！アユモドキを守る、亀岡市内の団体にインタビュー！　―３
「きょうと☆いきものフェス！２０２４」レポート！　―４～
企業と考える生物多様性保全　―６～
令和６年度活動トピックス　―８～

調べてみよう、
京都の身近な野生生物を！

細谷　和海

京都府では由良川が北に向かって、鴨川・桂川・宇治川が合流した後、淀川となって南に流れています。琵琶湖の影響も見逃せません。そのためルーツを異にするさまざまな淡水魚が28科116種も記録されています。この数はわが国の淡水魚全体のおよそ3分の1にも相当します。だから、京都府は生物地理学的に “日本の淡水魚類相のルツボ”とも呼ぶことができるのです。ところが、京都の水辺環境を調べれば調べるほど、その劣化ぶりには驚かされます。京都府(2023※)によれば、48種もの淡水魚がレッドリストに名を連ねています。実際、湧水が枯渇して絶滅しまったミナミトミヨ、ブラックバスの犠牲になった多くのタナゴやモロコ類、それに圃場整備や埋め立てによっていなくなってしまったアユモドキなど、数え切れません。自然保護の機運が高まる今日、身近な野生生物を保護し、かつての自然をとりもどそうとする試みが各地でなされています。研究者や行政が対象となる区域をくまなく調査するのには限界があります。地元の自然については、そこに住む方々が詳しいに決まっています。その対象は何も身近な生き物だけではありません。地元の学校の理科室の棚にひっそりと眠っている標本にも自然再生のヒントが隠されています。なぜなら残された標本から得られる情報は、ある意味、過去の環境の一部を切り取ったものと見なせるからです。採集地と採集年月日が分かれば原風景を知る手がかりとなるばかりか、自然再生の目標設定を可能にできます。最近、身近な自然に関心のある市民が収集した情報が科学的に高く評価され、それ自体「市民科学」として認識されるようになりました。

「きょうと生物多様性センター」では、生物多様性の保全と持続可能な利用をはかるため、「収集」・「利活用」・「継承」をテーマに様々な取組を進めています。研究者が長年収集してきた知見に加え、市民から寄せられた情報を一括して整理すれば、効率のよい保全施策を立案するための基礎資料となりえます。そればかりか、それらの情報を京都府民に知らしめることにより、京都の自然のすばらしさを体感してもらうこともできるのです。さらに教育現場で先生方に活用していただけるのなら、かならずや次代の自然保護の担い手が現れるはずです。

京都の多様で価値ある野生生物を先祖から受け継いだのが現代の京都府民であるならば、それに変更を加えず後世に伝えるのも皆さんの務めです。

きょうと生物多様性センター運営協議会
副会長　細谷　和海

1951年東京都生まれ。1975年京都大学農学部卒業。京都大学大学院・研修員、水産庁養殖研究所育種研究室長、中央水産研究所魚類生態研究室長を経て、2000～2018年近畿大学農学部教授、農学博士。2017～2019年日本魚類学会会長、現在、理事。現在、近畿大学名誉教授、環境省絶滅の恐れのある汽水・淡水魚選定委員会座長。専門は魚類学、系統分類・自然保護論。淡水魚の分類から外来種、水田生態系の保全まで。京都府環境審議会自然・鳥獣保護部会 部会長。

京都府内の学校に保管されていた液浸標本

京都府立亀岡高等学校の生物準備室に、ずらりと並べられた魚類や両生爬虫類等の液浸標本（薬液の中に標本を保管しているもの）。みなさんの周りにもこんなお宝、眠っていませんか？
古い動植物標本の情報提供はこちらまで！→

※令和6年1月10日、「京都府改訂版レッドリスト2023（は虫類・両生類・淡水魚類・コケ植物）」を京都府ホームページ上に公開。前回（2015）では43種だったが今回（2023）は48種に増加し、新規掲載種としてニホンイトヨ、オオシマドジョウ、ナガレカマツカ、ドジョウ、ニシジマドジョウが追加された。

保全現場からお届け！

アユモドキを守る、亀岡市内の団体にインタビュー！

亀岡市でアユモドキの保全活動をおこなう「NPO法人 亀岡 人と自然のネットワーク」に、当センターのコーディネーターがインタビューに伺いました！

NPO法人 亀岡 人と自然のネットワークとは？

「亀岡の人と自然の調和に向けて、より良い亀岡の未来に資すること」をモットーに、2003年にアユモドキの保全活動及び調査研究を開始。アユモドキだけではなく、スナヤツメなどの地域の希少生物の調査研究・保全活動を行いながら、子どもたちの環境学習を開催。平成21年環境大臣表彰（自然環境功労者表彰：保全活動部門）受賞、平成23年亀岡市生涯学習賞（共生賞）受賞。

～回答いただいた方のご紹介～

宇野 理事

「亀岡　人と自然のネットワーク」理事。 大学時代は両生類の研究に従事。社会人になってから生き物に関わりたいという思いが強くなり、大学時代に縁のあった亀岡市での活動に着目。亀岡の生き物に詳しい人といえば仲田さん、ということで面会し、2016年から会の活動に参加。社会人になってもアマミノクロウサギのフンをめくって甲虫を探したりと、生き物中心で全国を駆け巡っている。

上田 会長

仲田 理事

「本日のインタビューは宇野さんに任せます（笑）。アユモドキのチャームポイントはエラあたりにあるトゲです。アユモドキをつかんだ時にグサ！と刺さったことがあるけれど、それでも嬉しいもんです。」

-会としての保全活動を始めたきっかけは？-

仲田さん：原点は1981年、アユモドキが八木町のシンボルに選ばれたことから始まった保全活動です。その後、八木町の個体群が絶滅。2003年から「亀岡　人と自然のネットワーク」として亀岡でのアユモドキの保全活動を開始しました。

-アユモドキの魅力は？-

宇野さん：アユモドキはドジョウの仲間ですが、泳ぎがとても上手く、婚姻色からもアユモドキ（アユに似ている）と名付けた人はよく分かっているなあと感心します。見た目だけでなく、氾濫原で繁殖するという特殊な生態も興味深いです。現在、野生個体が京都府と岡山県の河川にのみ生息するという分布状況から、大昔には京都と岡山が河川で繋がっていて、アユモドキが行き来していたんじゃないかという、歴史の考察に繋がる面白さもあります。

宇野さんいわく、黒目がまん丸なところが素敵なんですって！

-保全活動で大切なこととは？-

宇野さん：一番大切なことは地元の人たちの協力を得ることです。以前はあぜ道を歩くと地元の方に「どこ歩いとんのや！」と怒られたこともありましたが、今では生きものの保全活動をしていることにご理解をいただいています。「こんなトンボを見ませんでしたか？」と聞くと、名前は知らなくても「そんなん見たなあ」と場所を教えてくれたり、目撃した年代を覚えている方もいたりと、皆さん身近な生きものを本当によく見ていらっしゃいます。

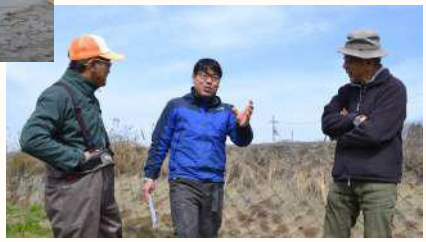
コイ目アユモドキ科。絶滅危惧IA類（環境省第4次レッドリスト）、天然記念物、絶滅寸前種（京都府レッドデータブック2015）、京都府指定希少野生生物。国指定の天然記念物（地域定めず）であり、現在では京都府亀岡市付近、岡山県での個体群が知られるのみである。

-保全活動を始めたい人へ、伝えたいメッセージ-

宇野さん：自分の得意とする分類群をひとつ、もってください。そして多様な生きものにも関心をもってください。得意をつくるためには、まず図鑑や博物館、水族館などで知識をつけてください。私はフィールドに行って野生の姿を見ることが一番面白いと思っていますので、もっている知識を全部使って出会いたい生きものを見つけた時は本当に楽しいです。実際に学んだ知識をフィールドで活かすには時間がかかりますが、自分で調べて、探しに行って、見つけた！という体験はとても大切で、これを繰り返し経験していくと、初めて行った場所でもお目当ての生きものを見つけられたりします。また、いろんな知識が増えると視野が広がり、草花や生きものの行動から季節を感じられたりと、さらなる面白みになります。

　最初は自分が今いる場所、住んでいる場所の生きものを知るのが良いと思います。保全活動も生活圏内でないと、定期的な草刈りや大雨が降った時の緊急対応など、日常的な活動はなかなか続きません。普段の生活を豊かに維持することこそが保全活動です。まずは身近な、自分の周りの生きものから知ってみませんか。

←アユモドキなどを調査する時の様子。胴長を履いてタモを使い、魚をすくいます。稚魚のアユモドキの数も調査するのですが、稚魚での識別はとても難しいです！ですが、経験を積めばだんだん分かってくるとのことです。



→わしらはみんな、「いきもの好き」っていうビョーキや、と笑いながら話し合う３人。このビョーキは周りにうつる上に、治す方法はないそうです（笑）。

インタビュアー：まつむら。当センターの魚類・両生は虫類担当。大学時代はウツセミカジカについて研究。

京都のいきもの・自然を知ろう！体験して楽しもう！
「きょうと☆いきものフェス！2024」

自然に関わる活動の紹介・交流等を通じて、生物多様性についての理解を深めるイベント「きょうと☆いきものフェス！2024 ～推しのいきものをみつけよう！～」を、令和6年9月28日・29日に京都府立植物園で開催しました。前年に続いて2回目となる本イベントは、70を超える団体や企業、学校等に参加いただき、来場者数は1万人を超え大盛況！生きものや自然をテーマに出展者と来場者が交流し、熱気を感じるイベントとなりました。

展示の様子

保全団体や企業、学校等が、地域の生きものや活動について紹介を行いました。今年は植物園の大芝生地にも出展エリアを拡大！魚やゴキブリ等の生体展示、標本展示、グッズ販売、よし葺（ぶ）きの屋根作りや杉玉作り体験など、個性豊かなブースが集い、盛り上がりました。

屋内ブース展示の様子

植物園会館前の様子

大芝生地の様子

中高生による販売チャレンジブース

よし葺（ぶ）きの屋根作り

杉玉作り

特別企画　推しのいきもの総選挙

今年のテーマ「推しのいきものをみつけよう！」にちなみ、有志の出展者に推しの生きものをＰＲしてもらう「推しのいきもの総選挙」を開催しました。ダンゴムシやニホンイシガメなどのよく知る生きものから、プラナリアやアカイカタケ（きのこ）などあまり目にする機会がないマニアックな生きものまで、21種がエントリー！来場者の方には、出展者の愛あふれるPR文を読んで「どれにしようかな？」と迷いながらも投票していただきました。

◀ 投票の様子 出展者のPRを読んで推しの生きものに興味が湧き、実際にブースを訪れるきっかけにもなったようです。

このムササビのロゴマークは京都自然教室の商標です

栄えある第1位は、京都自然教室の推し「ムササビ」！ムササビは「きょうと☆いきものフェス！2025」のマスコットキャラクターになる予定です。お楽しみに！
投票結果（総投票数1,230票）：第1位　ムササビ（103票）、 第2位　サワガニ（102票）、第3位　メジロ（98票）　投票いただいた皆様、ありがとうございました！

フォトギャラリー

ワークショップや自然観察会、活動発表会など様々なイベントが盛りだくさんだったいきものフェスを、写真で振り返ります。

湯本センター長の開会宣言のもとイベントスタート！会場の一体感が高まりました。

植物園内での自然観察会。野鳥や植物など様々な生きものの観察会が開かれました。

京都の自然をテーマとした活動発表会。小学生から大人まで幅広い年代の方が取組について発表しました。

初企画のスタンプラリー。会場内の6か所を巡って生きものスタンプを集めていただきました。

飛び入り参加できる竹蛇籠製作体験も！ベテランの作り手にコツを教えてもらい、コミュニケーションが生まれました。

会場内には出展者の学生さん扮するカッパも登場し、来場者に大人気でした。

屋内でも、工作体験や生きものの観察、いけばな等のワークショップや社寺の森をテーマとした講演会が開かれました。

植物園スタッフによる「飛ぶ種をとばそう！」。風に乗りヒラヒラ舞い落ちるタネを、子どもたちが一生懸命追いかけます。

1日目の夕刻に開催された出展者同士の交流会。活動を通した夢などを語り合い、熱く盛り上がりました。

「アースデイ丹後」に参加しました！

私たちの住む地球に感謝し、美しい地球を守り、地球のために行動する日、“アースデイ”。当センターは、令和6年4月28日に京都府立丹後海と星の見える丘公園にて開催されたイベント「アースデイ丹後」に参加し、「いきものさがしウォーク」を行いました。親子連れを中心にたくさんの方にご参加いただき、公園内の湿地やビオトープ池でアカハライモリやドジョウ、シマゲンゴロウなど様々な生きものを観察することができました。最初は生きものをこわごわ見ていた子も、時間が経つにつれ自らカエルを触れるように！緑豊かな自然の中で、身近な生きものに関心をもっていただく機会となりました。

令和７年度は丹後　海と星の見える丘公園（うみほし）にて

アースデイ丹後　＆　きょうと☆いきものフェス in 丹後
同時開催予定です！

TNFD時代のリスクとチャンス

企業のための生物多様性セミナー

令和5年9月に企業における生物多様性に関する財務情報の開示を求める枠組み（TNFDフレームワーク）が公開されるなど、社会経済活動において生物多様性への配慮が一層求められている中で、企業が行うべきことを学び、実践していただけるよう、「京商ＥＣＯサロン」（京都商工会議所主催）との共同開催により、企業のための生物多様性セミナー（全4回）を開催しました。

第1回では、㈱レスポンスアビリティの足立代表取締役による基調講演のほか、先進的に取り組む企業、学識者による事例紹介やご講演に加え、TNFD時代の新しいリスクとチャンス、そしてチャレンジについて、パネルディスカッションを行いました。

第2回では㈱島津製作所の「島津の森」見学を、第3回では日新電機㈱の雨庭（あめにわ）見学を行い、それぞれの企業における生物多様性に配慮した活動等について、意見交換をしました。

第1回セミナーの様子

第4回は、ワークシート等を活用しながら、参加者同士で交流し、生物多様性に配慮した事業活動に具体的にどのように取り組んでいくかを検討するワークショップを行いました。

第2回（株）島津製作所 「島津の森」

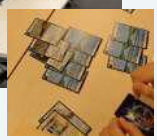
「島津の森」とは、本社・三条工場内に整備されている、敷地面積約8,000㎡の広大な緑地です。公益財団法人日本生態系協会による「ハビタット評価認証（JHEP認証）」において最高ランクAAA評価を取得、さらに令和7年3月には環境省「自然共生サイト」として認定されました。

第3回日新電機（株）「雨庭」

「雨庭（あめにわ）」とは、雨水の浸透・一時貯留機能をもつグリーンインフラの一種であり、日新アカデミー研修センターや久世工場内に整備されています。グリーンインフラ官民連携プラットフォーム（国土交通省）が主催する「第4回グリーンインフラ大賞」で優秀賞を受賞しました。

第4回ワークショップ

第4回はワークショップ形式で自社の事業に生物多様性保全をどう落とし込むか、各自でフローを作成し、同卓の方々と意見交換をしました。様々な業種の方にご参加いただき、活発な交流の場となりました。



アイスブレイクとして鴨川版　地球環境カードゲーム「My Earth（企画：NPO法人SoELa）」で対戦しました。

武田薬品工業株式会社 京都薬用植物園との連携イベント

「雲ケ畑に息づく植物と薪炭文化にふれ生物多様性保全について知ってみよう」 4月

「巨椋池に棲む生き物と周辺の人々の暮らし」 11月

京都には里山文化の象徴である薪炭林（しんたんりん）の名残りが各地で見られます。薪炭林とは、薪や炭として利用するために、人によって手入れされた雑木林であり、代表的な樹種としてコナラやクヌギがあります。京都市北区雲ケ畑（くもがはた）も、かつて炭焼きや薪生産として有名な薪炭の村であり、現在でも豊かな自然が残る地域です。その雲ケ畑で保全活動をしている「雲ケ畑・足谷　人と自然の会」、京都薬用植物園、当センター共催の講演を行いました。

ヤマシャクヤク
Paeonia japonica

写真は京都薬用植物園内に植栽されているヤマシャクヤク。当日は「雲ケ畑・足谷　人と自然の会」の方からはベニバナヤマシャクヤク（絶滅寸前種：京都府RL2022、府の指定希少野生生物）についてお話をいただきました。

カワバタモロコ
Hemigrammocypris neglectus

絶滅寸前種（京都府RL2023）。かつて巨椋池（おぐらいけ）に生息していたが、干拓や周囲環境の変化により野生個体は激減。京都薬用植物園では京都水族館と連携し、「小さな魚を救う大きなミッション」としてカワバタモロコの生体展示を実施中。

秋には京都薬用植物園内に新設された「いきもの共生エリア」にて、オグラコウホネやカワバタモロコなど、巨椋池（おぐらいけ）ゆかりの生物観察とともに巨椋池について学ぶ講演会が行われました。巨椋池とはかつて伏見区、宇治市、久御山町にまたがっていた広大な湿地帯であり、大池（おおいけ）とも呼ばれていましたが、昭和16年の干拓により姿を変えました。講演会では干拓史や当時の営み、巨椋池干拓とともに姿を消した生きものについて学びました。

令和６年度「きょうと生物多様性パートナーシップ協定」
締結状況・活動報告

（公財）日新電機グループ社会貢献基金

「琴引浜の鳴り砂を守る会」とともに保全活動を実施しました！

鳴き砂体験

令和5年10月に第1号となる協定を締結した（公財）日新電機グループ社会貢献基金と、令和6年4月と10月に京丹後市「琴引浜」の保全活動を実施しました。現地の保全団体である「琴引浜の鳴り砂を守る会」とともに、松並木の景観を守るため松の整備作業等を行い、浜辺の漂着ごみの回収とともに、琴引浜の海浜生態系について学びました。

枯れたマツを伐採する様子

海岸清掃の様子

（株）京都環境保全公社

「きょうと生物多様性パートナーシップ協定（第２号）」を締結しました！
「チマキザサ再生委員会」とともに保全活動を実施しました！

協定締結式
（写真左から 松井孝治 京都市長、湯本貴和センター長、株式会社京都環境保全公社 鍋谷剛 代表取締役社長、西脇隆俊 京都府知事）

令和6年5月に第2号となる協定を締結し、12月には「チマキザサ再生委員会」とともに、京都市花脊地域にて保全活動を実施しました。花脊地域では近年増加したニホンジカによる食害がチマキザサに大きな影響を与えています。当日は大学関係者など多様な立場の方が現地に集まり、雪がちらつく寒空の下、 京都環境保全公社のご支援により設置した、シカの食害を防ぐための防鹿柵内に地域のチマキザサを移植する取り組みを行いました。

チマキザサとは？
京都市北部山間地域に自生。祇園祭の厄除け粽、京料理及び京菓子に利用され、京都の伝統文化と深い繋がりがあるが、シカの食害等により絶滅の危機に瀕している。

移植の様子

厄除け粽

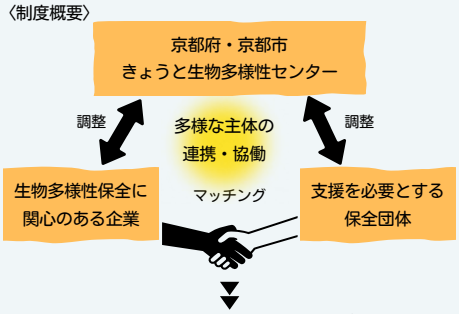
京都中央信用金庫

「きょうと生物多様性パートナーシップ協定（第３号）」を締結しました！

令和7年1月に、第3号となる協定を締結しました。本協定により、鴨川をはじめとする河川の生物多様性の保全活動や、生物多様性情報のデータベース化等の活動を進めてまいります。

協定締結式
（写真左から 西脇隆俊 京都府知事、湯本貴和センター長、京都中央信用金庫 白波瀬誠 理事長、松井孝治 京都市長）

〈制度概要〉



きょうと生物多様性パートナーシップ協定の締結

～「きょうと生物多様性パートナーシップ協定」とは～

本制度は、京都府域の生物多様性保全を推進するため、保全に取り組みたい企業と保全団体とのマッチングを図り、協定を結ぶことで、効果的かつ持続可能な生物多様性保全の取組を展開する制度です。本制度の詳細はこちらまで！→

収集

京都府生物データベースづくりの現況と今後の展開

京都府内の生物群のデータベース構築は、令和元年から京都府からの委託研究という形で、京都府立大学で開始したものです。府内の貴重な生物群の情報を後世に引き継ぐため、主として植物群落と昆虫類の情報整理、標本などとの連携のための生物リスト作りから始まりました。整理・収集するための生物情報は、書籍や文献として公表されているものもありますが、個々の生物の位置情報・確認時期まで含めた詳細なデータは、研究者個人、保全活動をしている団体や個人、あるいは愛好家たちが所有しているため、個々に提供をお願いする場合が多く生じます。また、学名や分類群の変更があったりもして、資料を読み解くことにも時間がかかります。

現在、収集対象の生物群は広がり、両生・爬虫類、淡水魚類や底生動物、鳥類となっています。令和7年3月10日現在の総収集件数は8分野144,794件、4月からはクモ類についても本格的に収集を開始する予定です。

収集の継続は大切ですが、現在の状況を過去データから把握し、未来へつなぐこと、生物多様性保全に資する方法を考えていく材料とすることが何より大切と考えています。昔はどこにでもいた（普通種だった）種は普通であるがゆえ、過去データが形としてほとんど残らず、過去の状況がつかめないという例が多くあります。今、現在の京都の生物たちの情報を多くの方から寄せていただくことも、私たちが呼びかけていくべきことの一つです。よろしくご協力ください。

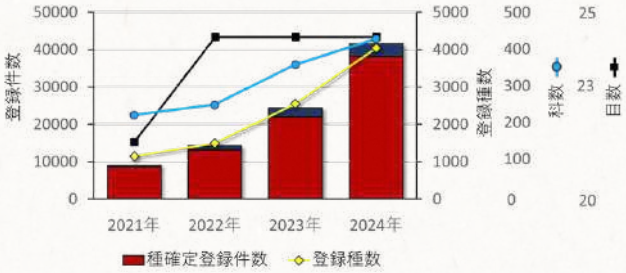


図１．昆虫類のデータベース登録数の推移

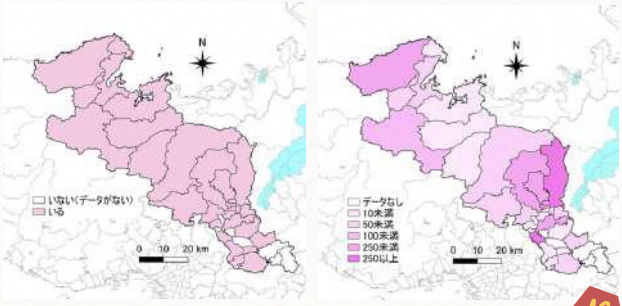


図2．セミっていない街があるの！？
（セミ類のデータ収集の状況）

10万件以上のデータを収集したと文中には記載していますが、例えば、セミ科だけに絞ると収集数は2,291件に過ぎません。これでは、本当にセミが生息できるかどうかの環境評価をするわけにはいかないのです。データベースは多くの人の協力があってこそ利用できるものになります。

データベース　こぼればなし

1,000年続くヒグラシの声

データベースをより正確なものとするため、収集に最も重要なことは、①種名、②確認した場所の特定、③確認の年月日を獲得することです。この3つが揃い、情報の出どころも確実であれば、非常に精度の高いデータを一つ、データベースに加えることが可能となり、担当者が情報収集にあたり苦慮するところでもあります。では、一番古い記録は？今のところ、見つけたのは、玉葉和歌集　17巻　雑4　2409　待賢門院堀河の和歌です。

「待賢門院かくれさせ給ひて後六月十日比、法金剛院に参りたるに、庭も梢もしげりあひて、かすかに人影もせざりければ、これに住み初めさせ給ひし事など、只今の心ちして、哀れつきせぬに、日ぐらしの声たえず聞こえければ『君こふるなげきのしげき山里はただ日ぐらしぞともになきける』」

堀河が仕えていた待賢門院は久安元年8月22日（1145年9月10日）に亡くなり、約一年後の6月10日（1146年7月10日）、待賢門院が再興し,住まいともした法金剛院を訪れ詠んだと記されています。現在も法金剛院は京都市右京区花園扇野町にあり、場所と日付（旧暦を現在の年月日に修正）、そして、まず聞き間違いはないと思われる「ヒグラシ」の存在（鳴き声）で種も確定。必要な情報完備です。さすがに近年は法金剛院周辺では、ヒグラシの声を聴くことはできませんが、ほんの少し西に位置する双岡では、夏になると今もヒグラシの声を聴くことができます。1,000年近く、この地にはヒグラシが生息し続けていることがわかるのです。

和歌にはたくさんの植物、動物、虫が登場しますが、その種と場所、日付（あるいは、年）を確実にたどるのはなかなか難しいところがあります。例えば、「きりぎりす」もよく出てきますが、これは現在でいうところのコオロギとされています。ですが、コオロギは種類も多く、なかなか種の確定までは至らずということになり、そこに、場所と時のデータを合わせるのはもっと困難になります。何より、データベース作成担当者の古典の素養も怪しいものなので、上記の待賢門院堀河の和歌にたどり着けたのは奇跡かもしれません。 今後も、いろいろな分野の方に示唆や情報提供をいただければと思っています。

背景写真：法金剛院　夏の風景。花の寺として有名です。

レッドデータブックから見る府の生物多様性
～京都府における生物多様性はいかにあるべきか～

京都府レッドデータブック（RDB）の次期改訂に向け、府内の自然環境を知り、今後の生物多様性保全やRDBの在り方について考えるフォーラムを府と共催で開催しました。京都府レッドデータ改訂検討委員会の委員長である村上興正氏を始め、各分類群の先生方に御講演いただき、当日は約140名の方に御参加いただきました。

京都府広報監の「まゆまろ」も駆けつけてくれました。湯本センター長とパシャリ。

利活用

森・里・街・川のつながりを結び、京都のみらいを紡ぐ

生物多様性に関する流域連携のキックオフ・フォーラム

令和6年度から、生きものの生息・生育地を保全・回復し、将来にわたり生物多様性の恵みを享受するため、「森・里・街・川」のエリアごとに生物多様性の保全活動の企画支援・コーディネートを拡充し、新たな活動の創出を促進しています。

令和7年3月9日には、エリア間のつながりの重要性や各エリアの取組事例・課題等を共有するとともに、参加者同士が交流し、これからの連動・連携を考えるキックオフ・フォーラムを開催しました。

JT生命誌研究館中村桂子名誉館長による基調講演に続き、森・里・街・川のそれぞれのエリアで活動されている方々から事例紹介、「森里海連環学」を提唱する京都大学フィールド科学教育研究センター舘野隆之輔センター長から話題提供いただき、さらに登壇者でつながりの重要性などについて意見交換しました。

講演会と併せて、会場には活動団体等のポスターを展示しており、講演会終了後、参加者同士による活発な意見交換・交流が行われました。

森

雲ケ畑・足谷　人と自然の会

鴨川の源流域である雲ケ畑地域での活動や源流域と市街地をつなぐ考え・想いについてご説明いただきました。

里

㈱中嶋農園／NPO法人木野環境

環境配慮型農業を始めた理由や資源循環の取組、伝えるための体験イベントについてご説明いただきました。

街

植彌加藤造園㈱

名勝渉成園や名勝無鄰菴庭園での生物多様性に配慮した育成管理についてご説明いただきました。

川

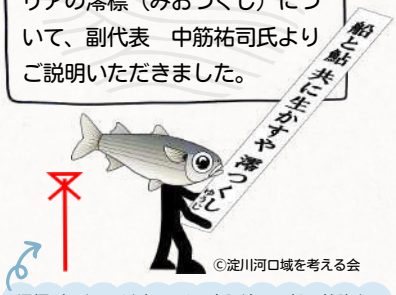
京の川の恵みを活かす会

アユが生き抜くために必要な、鴨川の魚道づくりや大阪ベイエリアの澪標（みおつくし）について、副代表　中筋祐司氏よりご説明いただきました。

パネルディスカッションの様子

令和6年度は里エリアにて生きもの調査を実施しました！

伏見区向島地域で環境配慮型農業を実施する㈱中嶋農園とＮＰＯ法人木野環境の取組について、市民参加型の生物調査を実施し、環境配慮型水田における生物相の把握を進めました。



©淀川河口域を考える会

澪標（みおつくし）とは…大阪湾にて船の航路を示すための標識。今はコンクリート護岸になっているが、かつては岸から澪標までは土砂の堆積による浅瀬が形成され、アユなどの稚魚の生息環境に適していた。

利活用

市町村の自然観察会へのコーディネート

桜並木が続く
八幡の名所です

noi-Kyotoの方にシロツメクサの
花冠づくりを教わる様子

八幡市主催の自然観察会に、NPO自然観察指導員京都連絡会（noi-Kyoto）の植物を専門とする方と、地元の京都府希少野生生物保全推進員（昆虫）を講師としてコーディネートしました。当日は天候に恵まれ、秋晴れの空の下、背割堤（せわりてい）の堤防沿いを歩きながら生きものを観察しました。掌を輪になるように軽く握った上に、クズの葉をのせて叩き大きな音を出したり(クズの太鼓)、きれいな落ち葉を拾ったり、植物についてじっくりと学びました。前方で植物講座が開かれている一方、後方では昆虫好きの子たちが推進員に質問ざんまい！他の大人が思わず笑ってしまうほど、矢継ぎ早な質問大会が起きていました。フィールドワーク後は屋内で採集した草花でしおりづくりをしたり、標本観察会を行いました。保護者も含めて大人はヘトヘトでしたが、子どもたちは最後までとっても元気で、八幡っ子のパワーを感じました。

令和６年度 活動トピックス

継承

虫の音を聴く文化を学ぶ鑑賞会

8月には、第27回国際昆虫学会連携イベントとして、「虫の音を聴く文化を学ぶ鑑賞会」を京都府と共催で開催しました。公益財団法人日本生態系協会の講師により国の重要文化財に指定されている府庁旧本館において、平安時代から親しまれた虫の音の文化のお話を聞いたあと、京都御苑へ。想像以上に多くの虫の音を聴くことができ、様々な虫の音の違いを教えてもらいながら、時間とともに変化する虫の音をじっくりと楽しみました。虫が羽をすり合わせて鳴いている様子もみることができました。

灯りで照らしてみると…
いた！なんて虫か、わかるかな？
（正解：ページ右下）

写真提供：岩井大輔

継承

庭園文化とコケの世界

10月には、九條家の数奇屋封書造りの建物で、現在も茶室が残されている京都御苑「拾翠亭」において「庭園文化とコケの世界」を開催しました。講師の先生方から、日本庭園の歴史や庭園の作り方や借景のお話、日本庭園の重要な構成要素であるコケ植物のお話を伺い、庭園に出てコケの観察も行いました。また、路地を歩き躙り口から茶室に入る体験と、お抹茶をいただき、ゆったりとした時の流れで、京都ならではの生物多様性について学ぶことができました。

～本イベントは三洋化成社会貢献財団よりご支援いただきました～

継承

キミもおちばの探検隊

みんなのお気に入りを集めて、秋らしい、鮮やかな絵巻物ができました。本イベントは「落ち葉探偵」に協力いただきました。

10～11月には府内の3か所（上賀茂試験地、海と星の見える丘公園、けいはんな記念公園）において、子どもたちが「おちばの探検隊」になりきり、気に入った落ち葉やドングリを拾い集めて観察したり、朽ち木の中にひそむツチモン（土壌生物）を探す、「キミもおちばの探検隊」を開催しました。

ツチモン探しではシロアリやヤスデ、ミミズなどが見つかり大盛り上がり！子どもたちだけでなく、保護者の皆さまも一生懸命探してくださいました。

～本イベントは三洋化成社会貢献財団よりご支援いただきました～

継承

サイエンスレクチャー

京都府立植物園では植物や多様性保全、植物園に関するさまざまな話題を、専門家がわかりやすく解説するサイエンスレクチャーを開催しています。令和6年度は当センターも共催として企画に参画し、11月には「植物と動物の共生関係-花と果実の多様性」をテーマに湯本センター長が講演しました。ゾウにのみ種子散布を依存するアカテツ科の植物をとりまく生態系をはじめ、世界の熱帯地域をフィールドとされてきた湯本センター長ならではの貴重なお話に、たくさんの方が聞き入っていらっしゃいました。

12月には「調べてまもる地域の自然～植物園の役割～」（高知県立牧野植物園　前田綾子氏）、1月には「半自然草原ってな～に？：草原から考える植物の保全」（大阪市立自然史博物館　横川昌史氏）、3月には「なぜ私たちは巨樹に惹かれるのか：人間と植物の多様な関わり」（横浜国立大学　中臺亮介氏）を開催しました。

アフリカのある地域では、種子が呪物として扱われることもあり、植物学者として種子を採取する湯本センター長のカバンは現地の方に避けられていたそうです。

正解：クツワムシ

継承

交流オフィスの活用について

第27回国際昆虫学会議関連イベント みぢかな生きもの相談会

交流オフィスを開設し2年目を迎えた令和6年、折しもこの夏は京都で「第27回国際昆虫学会議」が開催されました。センターでは同会議の関連イベントとして、夏休みの自由研究企画「みぢかな生きもの相談会」を開催し、葉の仕組みについて学ぶ「葉脈標本作りワークショップ」のほか、府・北部の冠島（かんむりじま）や琴引浜（ことひきはま）で採集された貴重な昆虫標本を、京都府立大学からお借りして展示をしました。

冠島は若狭湾内にある無人島で、国の天然記念物に指定されています。上陸は原則禁止のため、調査には特別な許可が必要です。冠島は京都府の鳥、オオミズナギドリの繁殖地でもあります。琴引浜は京丹後市網野町に位置する白砂青松の景勝地で、浜を歩くとキュッキュッと音がする、「鳴き砂」の浜として有名です。

交流オフィスでは今後も相談会や京都府内各地に関する展示をしてまいりますので、ぜひご来所ください。

葉脈標本（左上写真）を作るワークショップ。作業に集中して黙々と取り組んでくれました。

「自分で釣ったマゴチ（魚）の骨格標本を作りたい！」と、訪れてくれた小学生との制作風景。

～苔を身近に～ モスリウムワークショップ

10月にはモス広河原による「モスリウムワークショップ」を開催しました。当センターコーディネーターから生物多様性とコケの関わりについて講座を行った後、左京区山間地域広河原産のコケを使用した「モスリウム」を作りました。まずはコケ（ヤマゴケ、スナゴケ）に触れて触感を楽しみ、器やコケを選んだら、土を入れてコケを配置していきます。砂や石で飾りつけをする過程では、参加者同士で「ここどうしよう？」、「素敵ね！」と会話が生まれ、初対面とは思えないほど和気あいあいと盛り上がりました。皆様コケの魅力に目覚められ、大変楽しい会となりました。

参加者の感想

コケを通して生物多様性について学ぶことができました。

今までになかった知識や緑の楽しみ方を知りました！

-コケってなあに？-　不思議なコケの生態

コケ植物とは①維管束を持たず、②根・茎・葉の区別がない、原始的な植物です。形態の特徴として、根とは異なる「仮根（かこん）」を持ち、仮根は水分の吸収ではなく固着の役割をします。そのため、土がなくてもコケは様々な場所に生息ができます（岩やアスファルトの表面、樹皮など）。

交流オフィスの展示を募集しています！

応募要項はこちら

継承

担い手の育成

令和5年度に引き続き、生物多様性保全に係る若手人材を育成するため、府内各地域の保全活動に参加する研修会を実施しました。

令和6年12月には、大原野森林公園運営管理協会のご協力のもと、森の案内人の皆様と防鹿柵の補修作業・落ち葉かきを体験しました。シカによる食害やイノシシの掘り返しが激しい地域のため、防獣網へスカートネットの取り付けを行いました。その後は防獣網内で必死の落ち葉かき。背丈を優に超える落ち葉の量にびっくりです！寒い一日でしたが、春の芽吹きを思うと心が温まる一日となりました。

令和7年2月にはNPOやましろ里山の会と竹門康弘先生にご協力いただき、竹蛇籠（たけじゃかご）を用いた伝統的な河川工法（将棋頭型水制）を学びました。とても寒い中での開催となりましたが、第2回は17名、第3回は18名の参加がありました。皆様熱心に先生のお話を聞いておられました。石を詰める作業では一体感が生まれ、竹門先生の「設置完了！」の掛け声で大きな拍手が起こりました。

スカートネットの取り付け。絡まないように気を付けながら張ります。

落ち葉かきの様子。急斜面ですが、森の案内人さんはスイスイと登られており、若手も負けじと張り合いました。

たまりにいる生きものも観察水生昆虫の世界も面白いなあ。

2基目の将棋頭型水制完成！たまりができていく様子、とても気になります。

どんぐりみわけ図鑑を配布しています！

ついつい拾ってしまうドングリ。
一括りにされてしまいがちなドングリにも、いろいろな大きさや形があります。
一緒にドングリをみわけてみませんか？

令和6年度は、前年度に引き続き、府民の皆さまに生き物の分布情報を投稿していただく「きょうと☆いきもの調査」の題材として、どんぐりを取り上げました。皆さまにどんぐりに親しんでいただくため、「どんぐりみわけ図鑑」を作成し、配布しております。令和7年度は、別の生き物のみわけ図鑑も公開予定ですので、完成しましたらホームページやメルマガでお知らせします。

こちらは当センターHPからもダウンロード可能です。
インターネットにて、「きょうと生物多様性センター　みんなでドングリを調べよう！」と検索、あるいはこちらから→

賛助会員の募集

当センターでは、個人や企業、保全団体などに幅広く参画いただき、力を合わせて京都の自然環境を守る取組を進めていきますので、ぜひ賛助会員としてご支援をお願いいたします。詳しくはこちら→

問合せ先

【本部オフィス】京都府立植物園　植物園会館内　〒606-0823 京都市左京区下鴨半木町
【交流オフィス】左京区役所２階⑭番窓口　〒606-8511 京都市左京区松ケ崎堂ノ上町7番地の２
開館日　毎週月曜日、水曜日、金曜日　午後１時～午後５時（祝日・休日・年末年始を除く）
電話番号：075-354-5275
メール：contact@kyotobdc.jp
HP：https://www.pref.kyoto.jp/biodic/index.html

発行：きょうと生物多様性センター　令和7年3月

HP　メルマガ　X（旧Twitter）　Instagram